

仏教の立場から

田村芳朗

仏教は方便説と眞実説とからなっているが、死生観についても同様で、次のように問うことができよう。仏教は人生観で出発したのか、人間観で出発したのか、と。仏教が人生観であれば、人生の無常ということ、そしてその観察が仏教の根幹をなす。人間観であれば、人間の煩惱の分析が仏教の根幹をなす。仏典ではこれら両方が見られる。前者ならば、仏教は無常の人生からの超越をめざすことになり、後者、すなわち人間の煩惱の分析であれば、悟りは人間の煩惱の断滅ということになる。釈迦自身はこのどちらであるうか。

仏教の死生観——仏教では生^{じふと}死観という——これは明らかに人生論からである。大乘経典も含めて二種類の死生——生死観がある。一つは不死永生の説。死を否定する説である。もう一つは不生——つまり生を否定する説で、不生不死、無生無死を説く。不死

永生のほうは仏教以前でもバラモン教で主張しているところで、不死生天思想、あるいは生天思想がそれである。これを仏教は方便説として取り入れたのである。バラモン教の場合はそこに階級制があり、最高階級で梵行 (Brahmacharya) を修するバラモンは死ねば天に生まれて不死の生活を送る。それ以下の階級は再び人間界にもどってくる。さらには地獄へも墮ちる。いわゆる輪廻転生である。すなわち、現実社会の営みに携わった武士・王族や庶民は善業 (punya-karma) によって一度は天界にのぼるが、改めて人間界に再生すると考えられ、奴隷以下の存在や悪業 (dharma-karma) の者は人界から地獄にまで輪廻転生していくとみなされた。こうして、釈迦出現の頃には、生天・再生・転生の思想が出そろうことになる。

これに対して、仏教は階級差別を断平拒否して、逆に善をすす

める方便としてこれを用いるのである。すなわち、いかなる人間でも善業、善き行為をすれば天に生まれる、悪業をなせば地獄に陥る、と説いた。善をすすめ悪を抑えるのである。もう一つ重要なことは、仏教では、天に生まれるとしても、その天界をも輪廻転生の中に入れてしまう。つまり、不死生天思想は絶対でなく、相対的な考え方とみなし、天界というのも相対的な世界である、とするのである。かかる不死については、「不死の境」(amatapada甘露道、『法句経』二二、一一四)、「不死の門」(amatavara甘露門、『法華経』化城喻品第七)などと説かれている。

仏教の説では、不死生天に対して不生不滅の涅槃界というものを加えるにいたった。不死生天説においては、まだ生と死とが相對しており、いまだ生に執着している。不死生天説は死を否定して生を採り、いまだ生に執着している。仏教は、かかる不死生天説を、前述のごとく、方便説とし、その上に不生不滅の絶対界を加えた。これが仏教の真実説である。不死というよりも不生というのである。仏についてしばしば「生は尽きた」という。生の滅尽、生を先に否定するのである。それに死を加えると、不生不死、無生無死であり、それが仏の境涯、涅槃界、涅槃の絶対界である。かかる不生については、いま挙げたように、「生は尽きた」(Kinaṃ bhūtiṃ suttāni paritā 八二等)、「生の滅尽」(Jatikkhaya 同五一七、『法句経』四二三)などと説かれている。

不死永生の天界と不生不滅の涅槃界の特色を比較してみると、

不死生天とは天界に生まれることであるが、その天界も輪廻転生に入る。それは天への横の超越である。これに対して不生不滅の涅槃界は縦の超越である。生と死の現実を縦に超越するのである。くりかえして述べると、仏教において不死ないし不死永生は方便説であり、不生ないし不生不滅は真実説で、後者こそが仏教の死生観ということになる。もとより不生とか不生不滅はバラモン教でも説かれてはいる。ただし、バラモン教では、不死の天界は再生・転生を越えた世界ということで不生と言ったり、アイトマンないしプルシャは常住・不変で、生じたり滅したりしないということとで、不生不滅が説かれている。(『カータカ・ウパニシャッド』二・一八、『マガヴァッド・ギータ』二〇二) 無我・空を立場とする仏教は、それとは反対に、主体としての仏の心境について言ったもので、さきに不生の説を例示したが、不生不滅の説の場合も同様で、「生死の彼岸に達した」(Jitimarṇasaṃ paraguṃ suttāni paritā 三三)、「生死を超越した」(Jatimarṇaṃ upatīvato 同五二〇)などと説かれている。ここに、真実説としての仏教特有の死生観がうかがい知られる。

このことに関連して、すでに触れたところでもあるが、仏教における不生ないし不生不滅の説は、一般にいわれる不死永生の考え方に対する批判ともなるのである。すなわち、不死永生の考えは、いつまでも生きていたいという生にたいする執着の産物であり、そこから死を否定しようとしたものである。これに対して、

仏教は、死の超克は生にたいする執着を断つこと、つまり生の超克にあるとして、生のほうを否定し、不生と説いたのである。また、不死永生説においては、否定される死と肯定される生ということで、死と生とが二元対立している。この点については、二元分別的な考えの突破・超越ということで、生と死の再否定・両超越、一口でいえば不生不滅が説かれてくるのである。原始経典においては、生と死の二元対立の超越が、しばしば現世と来世、人界と天界などの二元対立の超越と並べて説かれたゆえんである。大乘経典になると、生死ともに空ということから、改めて不生不滅が強調された。『維摩経』では、空を関係の上から「不二」（入不二法門品第九）と称したが、これを生死にあてはめると、生死不二（一如）となる。

ところで、仏教内部で問題が生じた。一つは、死後の生存の問題である。仏教では、本来、死後の生存というような死を横へ延長することはおこなわれない。ゆえに釈迦は「如来は死後存するや否や」というような質問に対して答えなかった。（捨置記答）しかし、一般にはそれでは済まなくなつて、一種の方便説として、不生ないし輪廻転生説が、仏教において主要な位置を占めるにいたるのである。直接には無我・空であつて、靈魂を立てることはできない。そこで間接に、ブドガラ、つまり業によって死後もまた転生していくとしたのである。このことから、過去・現在・未來の三世の考え方も単純でなくなり、生まれる前の前世、現世、

そして死んだ後の来世というような三世の思想となり、十二因縁（無明・行・識・名色・六処・触・受・愛・取・有・生・老死）も三世常住の因果とされ、前世・現世・来世に分断される。

もう一つの問題は不生ということである。すでに触れたように、不生ないし「生の滅尽」は、生に対する執着を断ち、超越することを意味したものであったが、仏教の内外において、それが生きることの否定、生きることを止める、生きることの意味の喪失、というように誤解された。現実社会において活動していた大乘教徒たちは、この点を弁明した。大乘の在家仏教徒たちは不生不滅の死生觀をなんとか現実の中に生きていくものとしようとした。内部でも、いわゆる小乗仏教は現実から離脱する、よく言えば超越だが、超越しっぱなしで、現実へもどつて現実の中で生きていくことを忘れた、と批判し、一種の宗教改革が生起した。かくして、大乘仏教徒たちにおいては、生死の超越から現実の生死にもどり、その中を生きていくことが、課題となつた。生死即涅槃というタームもできたのである。現実の生死に即して、涅槃の絶対界が感得されるという意味である。龍樹の『中論』に「生死は涅槃といかなる差別もない。涅槃は生死といかなる差別もない。」（九偈）というように、生死に即して涅槃があるというように説かれ、生死に立って生死なし、涅槃に立って涅槃なし、空である、生死もなければ涅槃もない、という考え、積極的にいって生死即涅槃という考えが、大乘仏教の中で熟していくのである。

このようにして、現実にもどって生きていくための仏教の面がクローズ・アップされてくると、それはただちに現代の切迫した諸問題と直接にかかわりあうことになる。現実にもどると、現実に死ぬというのは動かしがたい事実である。その人生を最後まで生きぬく。そこに生き甲斐を見出していく。それが大乘仏教の問題となる。一般に仏教の現代の問題となるのである。

具体的には、脳死、安楽死、尊厳死、ホスピス等々の諸問題に對して、その解決策が仏教の生死観から出てくるのかどうか。キリスト教とは、解決策にしても、またそもそも発想法にしても、相違することは、これまで述べてきたところから、理解されるであらう。

最後に、このような仏教の生死観は東西思想のいずれの側に属するかということであるが、無常な人生の觀察に端を發しており、キリスト教のごとく、死を人間の罪に対する罰とみなすような考え方は、仏教には存しないことからすれば、仏教は東洋思想の中に包含されるかもしれない。(キリスト教が西洋のものかどうかも問題であるが、その伝播地域が西洋であることは明らかで、この意味からして仏教は西洋でないと言いうことができよう。)

ただし、仏教は眞実説として生死超越、現実超越の思想を、方便説として不死永生、輪廻転生の思想を、有している。これが中国や日本に伝来すると、中国的な考え方、日本的な考え方、その現実主義、現実中心の立場から、批判が起る。中国では、儒教と

仏教の對論がしばしば行われる。孔子の『論語』に、生さへも知らず、いわんや死を知ろうか、という考えが表明されている。仏教には方便説があるので、死後の存続について儒教と論争を起すのである。日本では、現実肯定の考えが支配的であるので、輪廻転生の考えは批判された。『万葉集』の大伴旅人の歌では、輪廻転生を皮肉って、しかも酒をほめたたえるのがある。この世さえ楽しければよい、死んで虫になろうと、鳥になろうと、気にしない、というのである。しかし、後には、輪廻転生説も日本思想の中に浸透する。このようなわけで、仏教を單純に東洋思想の中に一括するのは無理であるといわなければならない。

なお、次の拙稿を参照されたい。

「鎌倉新仏教における生死観」 仏教思想10 『死』、平楽寺書店、昭和三年。

(たむら・よしろう、仏教学、立正大学教授)
※シンポジウム提題者、田村芳朗氏は三月十二日、急逝されました。
謹んで哀悼の意を表します。本誌に掲載した氏のレジュメは、編集に一切を託されたので、発表タイプ、要旨集等により記述し、氏に送っていたいたたいたものでは。